

## はじめに

今日、教育実践や教育的活動（ワークショップなども含む）の分析に、実践活動のビデオ映像を用いての、実践のリフレクション（振り返り）が盛んに行われている。

しかし、一方ではビデオ撮影技術は日に日に進化している（ビデオカメラによるビデオ・テープ録画から最近パソコンやスマートフォンなどによる撮影とメモリー保存・再生など）にもかかわらず、それらをどのように活用して、よりよい実践活動に向けての分析や討議（カンファレンスなど）に生かすべきかについて、きちんとした理論をふまえての最新技術の活用法については、あまり論じられてこなかった。その結果、家庭用のビデオカメラによるビデオ・テープ録画とその映像をスクリーンに映し出しての検討会（カンファレンス）となるのが、ごく一般的な「ビデオ分析」

の実態ではないだろうか。そのような「ビデオによる実践のリフレクション」の改善のための、新しいビデオ技術を開発したのであるが、そのビデオ技術がいかに「すばらしいか」を宣伝するのが本書の意図ではない。本書の特長をあえていうなら、まず、「実践をリフレクションする」とはどのようなことかについて、徹底的な検討・吟味をすることからはじめる、ということである。その議論をしっかりとふまえて、そこから「すぐれたリフレクションのありかた」を導き、それを実現するためのビデオ技術を開発する、という段取りになる。そこから、ビデオ技術の説明で、「なぜそのような分析ができるようにしたのか」が、ただ思いつきで「こういうこともできるといいなあ」という発想からではなく、「すぐれた実践研究」ではこういうことが分析できなければならない、という理論的裏づけをもって開発されていることがわかるであろう。つまり、本書のねらいは、「実践を分析する（リフレクションする）」ことについての理論的考察と、それをふまえてのよりよい分析を可能にするビデオ技術の開発とその活用について、「両者を統合して紹介する、ということにある。

そこで1章では、そもそも「実践を振り返る（リフレクションする）」とはどういうことかについて、ドナルド・ショーンの名著『リフレクティブ・プラクティショナー「省察的実践者」(The

『*Reflective Practitioner*』(邦訳では、佐藤学・秋田喜代美訳『専門家の知恵——反省的实践家は行為しながら考える』、柳沢昌一・三輪建二監訳『省察的实践とは何か——プロフェッショナルの行為と思考』で知られている)をもとに考えを深める。さらに、シヨーンのリフレクション論に欠けている点として、リフレクションの対象が教育的対象(子ども、幼児)の場合に、傍観者的(三人称的)観察からではなく、対象に「二人称的(共感的)」にかかわるなかでのリフレクションの重要性を、ヴァスデヴィ・レデイの「二人称的アプローチ」論をもとに検討する。これらの考察をもとにして、ビデオ映像をどういうことをどのように分析し省察すべきか、そのためにはどのようなビデオ分析が可能とならねばならないかを論じる。

2章では、「実践のリフレクション」が実際の教育実践研究において、どのように進められているかについて、とくに、ビデオ映像記録をもとに進められるカンファレンス(検討会)の一般的な現状をレビューする。そこから、現在のビデオ・カンファレンスの問題点と改善すべき点を整理し、「望ましいカンファレンス」のためのビデオ技術のありかたを整理する。

3章は、1章と2章をふまえて、適切なリフレクションを可能ならしめる望ましいビデオ分析のためのツールとしてCAVScene(「キャブシーン」撮影、記録、分析によるリフレクションのツール)の開発とその活用法について説明する。

はじめに

4章では、CAVSceneと併行して開発されたもうひとつのビデオ・ツール「デキゴトビデオ」について説明する。デキゴトビデオは、同一空間を複数のビデオカメラで同時に撮影し、それらを複数の画面で並行して視聴できるようにしたものである。これは小グループで複数のメンバーがかわりあう状況を分析したり、スポーツのプレイ（単独でも、グループでも）の動きを多視点から同時並行的に撮影して分析することを可能にするツールである。

5章では、これらのビデオ・ツールの活用から、実践の意味、おもしろさ、多様なものごとの関連づけなど、従来のビデオ・ツールではほとんど得られなかったであろう興味深い分析について、具体的な事例を用いて解説している。その1節はCAVSceneの活用からみえてくること、2節はデキゴトビデオの活用からみえてくることを、具体的事例をもとにして論じている。

6章では、一九九〇年代にある小学校の担任だった苺宿が子どもたちにビデオカメラを持たせて撮ったビデオ映像を見ながら、「ビデオを撮る」「ビデオを見る」ということの意味を、苺宿・佐伯・刑部が語りあった。その際、ビデオ撮影は単なる「記録」ではなく、撮る人の「語り」であり、撮られている対象（ヒト・モノ・コト）が語り出すことを引き出して代弁するものだということが確認される。

最後に終章は、本書におけるビデオ・ツールの開発とその活用の背後にある中心思想として、

はじめに

「おもしろくなければ、つまらない」という考え方について説明してしめくくる。

(佐伯 胖)

## 1章

---

リフレクション(実践の振り返り)を考える

——シヨーンの「リフレクション」論を手がかりに



## 実践の「リフレクション（振り返り）」を考える

本書の表題は、『ビデオによるリフレクション入門』であるが、そもそも、リフレクション（振り返り）とは、どういうことを考えることからはじめたい。

筆者（佐伯）が現在かかわりをもっている長野市の信濃教育会教育研究所は、設立から約七一年（二〇一七年四月に入所した研修生が第七一期生）になるが、現職の教員に対して一年目は県教育委員会の計らいで長期研修派遣として研究所に入り、研究所にはほぼ毎日来て研修を受け、二年目は現場に戻り勤務しつつ毎月一回程度研究所に来て研修を受けるといふ機会を提供している。ところでその「研修」では、伝統的に「自らの実践の振り返り」と「研修員同士の学びあい」に専念することになっている。入所にあたっては、研修員は過去の授業実践のさまざまな記録（ビデオ映像、生徒が書いた「学習カード」、教師の指導記録、など）をもとに、自らの実践を徹底的に「振り返る（リフレクションする）」のである。それをほぼ隔週でA4判で七〜八頁の報告書にまとめて提



出し、同じく隔週に開催される検討会（「テーマ研」と呼ばれる）では、その期の研修員（八名）の報告（報告書はすべて事前配付済み）をもとに、研修員たちと研究所の所員（多くは元校長と大  
学教員）らとで徹底した話しあい（朝九時半から夕方五時すぎまで）が進められる。筆者はその  
「検討会」に参加するのだが（ときどき、気がついたことをコメントする程度）、「実践のリフレク  
ション（振り返り）」の厳しさとおもしろさに、毎回大いに感じ入っている。そのような実体験を  
もとにしつつ、「リフレクション（振り返り）」とはどういうことかについて、考えていくことにす  
る。

## 2

### シヨーンの「リフレクション」論概説

Donald A. Schön (Donald A. Schön) の『リフレクティブ・プラクティショナー』(*The reflective practitioner: How professionals think in action*, Basic Books, 1983) には、二種類の邦訳がある。ひとつは佐藤学・秋田喜代美訳の『専門家の知恵——反省的実践家は行為しながら考える』（ゆみる出版、